

令和4年度総会、創立30周年記念式典を和やかに開催しました



太田英晴理事長の挨拶
(福島民報社提供)



フィリップ・セトン大使から祝辞をいただきました
(会員撮影→)



理事長から大使への記念品贈呈



ここ2年間、お集りの総会、イベントを開催出来ないうまででしたが7月26日(火)に40名(委任状含めて86名)出席の総会(17:00~)とフィリップ・セトン駐日フランス大使ご夫妻はじめ御来賓臨席を仰ぎ60名参加の創立30周年記念式典(18:00~)をザ・セレクトン福島で開催しました。

総会は太田英晴理事長の挨拶の後、議案審議に移り[令和3年度事業報告収支報告]と[令和4年度事業計画収支予算][任期満了の理事13名の改選]の3議案は原案通り承認されました。続いての記念式典では、大使御一行3名様を拍手でお迎えした後、フランス国歌、君が代の演奏が荘厳に響きわたり、良い雰囲気の中芳見弘一副理事長の開会の辞で式典が開始されました。

太田代表理事が「四代目理事長の私があるのも初代山田広助氏、二代友田昇氏、三代瀬谷俊雄氏のリードの基で協会活動が続いているからこそ。新型コロナの影響で、交流が難しい状況だが、人類の英知は再び日仏両国の距離を縮めてくれるはず。30周年を福島とフランスの交流促進の新たなスタートとしたい。」とあいさつ。続いて、三十年在籍の会員望木昌彦理事、山川彬理事、太田豊秋理事に感謝状・記念品が贈られた後、来賓10名様の4名からのお祝いのことばをいただきました。セトン大使から「大震災から11年を経過したが復興を目指す福島県民を後押しする気持ちは色あせることなく続いています。今後も協会の活動を通して日仏の関係強化につなげてほしいです。」の祝辞をいただきました。

(公財)福島県国際交流協会理事長 小沢喜仁様、福島市国際交流協会会長(福島市長) 木幡浩様、仙台日仏協会会長 田中正人様からも三十年に及ぶ活動と今後に期待することばを祝意を込めていただきました。理事長からセトン大使へ特選雫原酒「妙花蘭曲」の贈呈がありました。祝宴に移り「福島シャンソンの会」メンバー(会員)の歌唱披露で場が盛り上った処で渡邊博美副理事長発声の乾杯で、懇親のときに移りました。

村木洋子教授(山梨県立大学)のピアノ演奏が場を和ませる中、会員各々もしばらく振りで会話が弾み飛沫に注意しながらの歓談が続きました。会場内の装花(法人会員から)が中央左右に豪華に彩られて文字どおり花を添えました。40数年振りの当時若かった高校教諭と生徒さんの驚きの再会やら、毎回出席ある料理教室講師菅野喜代治シェフの豊富な人脈が伺える出席者へのお声かけと笑顔が見られました。

また、シャンソン披露会員のテーブルに歩まれた大使奥様が労をねぎらわれて、質問を三宅通訳様を介して頂くなど歌唱した会員諸姉を感激させました。懇親の終わり近くで壇上のシャンソンメンバーのリードで「オー・シャンゼリゼ」を声を抑えながらも、皆さん斉唱した時は、30周年の節目をお祝いするムードを醸し出していました。



“オー・シャンゼリゼ”でお祝いムード
シャンソンの会のリード良かった



伴奏する村木洋子教授

名残り惜しいなか、大使御夫妻の帰京される時間が迫り中締め時間となりました。中川俊哉副理事長が「いろいろありますが日本伝来の一本締めで行います」の発声で全員がパチンと閉めました。総料理長林浩生シェフの料理説明が2度あり、精魂込めた料理も当然皆さんの式典の満足度にプラスしたと思われれます。ホテルスタッフの皆さんありがとう美味しかったです。ご出席された方々に感謝して今後の活動は、会員の皆様の協力を頂きながら発展させて参ります。

私のフランス語日記 **Mon journal en français**

« Bonjour à tous! Nous sommes maintenant devant l'école primaire Ukedo »

Aujourd'hui, je vais présenter l'école primaire Ukedo aux étudiants qui sont à l'université aux États-Unis sur zoom. C'est un voyage virtuel. Je vais expliquer ce qu'il s'est passé là le 11 mars 2011. Je tressaille de joie pour mon travail comme interprète. Cela faisait longtemps que je n'avais pas été interprète.

Namie est située dans la région de la côte pacifique de Fukushima, au Japon. La région a été sévèrement submergée par le raz de marée, le tsunami, le 11 mars 2011. L'école primaire communale de Namie, Ukedo shogakko, a aussi été détruite par le tsunami à ce moment-là, mais miraculeusement tous les élèves et les instituteurs se sont réfugiés un lieu sûr.

L'école a été désignée comme vestige qui conserve la mémoire du désastre sismique et du tsunami (shinsai-ikou en japonais) par le gouvernement japonais, le 24 octobre 2021 (l'année dernière).

J'y suis allée plusieurs fois avec des touristes étrangers comme interprète. C'était la première fois que je visitais l'intérieur de l'école. La force du tsunami a dépassé mon imagination. Le tsunami de plus de 15.5 mètres a tout entraîné.

Après le grand tremblement de terre, tous les élèves et les instituteurs ont immédiatement couru vers les hauteurs, sans rien, dans le froid, grâce à la décision rapide du directeur de l'école. Il y avait un élève en fauteuil roulant parmi eux mais un instituteur a couru en le portant sur son dos.

Ils étaient à peine arrivés au pied d'une montagne basse quand le tsunami s'est abattu sur la région. Tout ressemblait à la mer. Ils ne pouvaient pas repartir en arrière, et ils ont donc commencé à marcher vers l'artère principale, la Route Nationale 6 en recherchant un raccourci à travers la montagne Ohirayama.

C'était très difficile de chercher, mais un des élèves connaissait par hasard un raccourci parce qu'il avait couru sur les chemins de cette montagne pour l'entraînement avec des membres de l'équipe de baseball. Ils ont donc traversé la forêt avec son aide.

Quand ils sont arrivés sur l'artère principale, un grand camion est par passé par hasard. Le conducteur a gentiment emmené 100 personnes environ (82 élèves, 13 instructeurs et les personnes réfugiées) à la mairie. Ils se sont rassemblés au gymnase, qui était le lieu de refuge à ce moment-là. Tous les élèves (dont les élèves de première année) et les instituteurs se sont réfugiés en sécurité.

請戸小学校

「みなさん、こんにちは！私たちは今請戸小学校の前にいます。」

今日はアメリカの大学にいる学生さんに請戸小学校をズームで紹介するヴァーチャルツアーの日。

2011年3月11日そこでどんなことが起きたかを説明するのだ。

久しぶりの通訳の仕事にわくわくする。



請戸小学校の前で

浪江町は日本の福島県の太平洋側に位置し、2011年3月11日大地震による津波に襲われた。浪江町立請戸小学校も津波に飲み込まれたが、奇跡的に生徒、先生全員無事に避難することができた。

この学校は去年10月24日に震災遺構に指定された。私はそれまで何度も外国人グループをここに案内してきたが、校内に入って案内するのは初めてだった。津波の威力は想像を絶するものだ。15.5メートル以上の津波が全てを押し流した。



津波の被害を受けた浪江町立請戸小学校の教室

大地震が起こってすぐに、全ての生徒、先生は校長先生の素早い指示によって、寒い中何も持たずに高い所に向かって走った。生徒の中には車椅子の子もいた。先生はその生徒を背負って走った。

大平山という低い山の麓の方に着いたまさにその時津波がその地域を襲った。地域全てが海のようなだった。彼らは戻ることはできなかった。それで山の反対側を国道6号線の方に向かって近道を探しながら歩き始めた。

森の中で近道を探すのは難しかった。しかし、たま



浪江町の児童をトラック荷台に乗せて避難所へ

D'autre part, les opérations de sauvetage et de recherche ont continué jusque tard dans la nuit. Il faisait sombre et froid. Les opérations ont fini par s'arrêter mais elles devaient reprendre le jour suivant, le 12.

Cependant le 12, le gouvernement japonais a ordonné l'évacuation de l'ensemble des habitants à cause de la fusion d'un réacteur nucléaire et des explosions d'hydrogène à la centrale nucléaire de Fukushima Daiichi. Bien sûr, les équipes de secours et de recherche ont également été évacuées, mais les opérations n'ont pas pu continuer. Elles ont été relancées à la mi-avril. Il y avait peut-être des personnes qui ont appelé au secours le 12 mars... Malheureusement, nous n'avons pas pu sauver des vies que nous aurions probablement pu sauver.

Les étudiants américains ont calmement écouté. Ils ont posé beaucoup de questions.

Un des étudiants m'a demandé de montrer l'horloge qui s'est arrêtée quand le tsunami s'est abattu sur l'école. Il a peut-être étudié sur Ukedo à l'avance. J'étais très heureuse.

Je pense que l'histoire de l'école primaire Ukedo n'est pas un exemple de réussite. C'était juste par chance et par hasard à ce moment-là. Bien sûr, le jugement précoce, l'action rapide, la volonté inébranlable, l'union et la solidarité sont dignes d'éloges. Mais il ne faut pas s'en contenter.

Nous devons apprendre beaucoup de cette histoire pour les mesures préventives contre les sinistres à l'avenir.

Michiyo KAINUMA

たま近道を知っていた生徒がいた。彼は少年野球チームのメンバーで、トレーニングにそこを走ったことがあったのだ。彼の案内でみんなは森を抜けた。

どうにか国道に着いた時、偶然大型トラックが通りかかった。運転手は親切にも100人ほどの人々（生徒82人、先生13人と避難してきた地域の人たち）を町役場に連れて行ってくれた。そして彼らは避難所になっていた体育館に集まった。請戸小学校の生徒（一年生も含め）教員全員が無事だった。

一方、3月11日津波による行方不明者の救助捜索は夜遅くまで続けられたが、寒くなり、暗くなったのでその日は終了した。次の日の12日に再開する予定だった。しかし、12日、政府は福島第一原子力発電所でのメルトダウン、水素爆発により住民に避難命令を出した。勿論、捜索隊全員にもだ。捜索活動は続けられなかった。そして再開できたのは4月半ばだった。3月12日には助けを呼び求める方々がまだおられただろう。救える命を救えなかった。

アメリカの学生さんたちは静かに話に耳を傾けていた。いろいろな質問も出た。ある学生は、津波が学校を襲った時のまま止まっている時計を見せて欲しいと言った。事前に請戸のことを勉強してくれていたのだろう。嬉しかった。

私は請戸小学校の話はサクセスストーリーだとは思っていない。ただその時起きた偶然とチャンスによるものだ。もちろん、素早い判断、敏速な行動、不屈の頑張り、みんなの協力、連帯などは称賛に値するものだ。しかし、それに甘んずるべきではない。

私たちはこのような話から多くを学ばなければならない。

これからくる災害の防災ために。

(フランス語会話教室受講生 貝沼実千代)

今回は、川崎豊さんお願いします！

夏野菜のピクルス

暑い日が続いています。こんな日は、家庭菜園で採れた夏野菜のピクルスは、いかがでしょうか？



きゅうり、ズッキーニ、ゴーヤ、ミニトマト、茗荷などお好きな野菜をさっと湯どうしします。冷たい水に取って、水気を切ります。

ピクルス液は、分量を作っておき、つけるだけ。げんきに夏を乗り切りましょう。

ピクルス液

(米酢7カップ、ミネラルウォーター4カップ、砂糖4カップ、塩大さじ8、赤唐辛子2本、ベイリーフ4枚)

を中火にかけて、煮立ってから10分ほど煮ます。冷まして、翌日に使います。

よく冷えた白ワイン、冷たい日本酒にもピッタリです。

遠藤崇子（会員）

「クラフトサケ」新しい酒造りの醸造所を訪ねて。秋田県男鹿市～福島県南相馬市小高

最近、クラフトビールやクラフトジンのお店が福島市内にもオープンして、新しい味わいを求めるお客様が賑わっています。「クラフト」とは、技能や技巧などの意味があることから、作り手（職人）がこだわって少量生産で作った製品を「クラフト〇〇」と呼ぶようになったとか。そうしたお店には日本の、または世界各国の個性あふれるお酒が揃い、「このお酒はあ～だ、このお酒はこ～だ」と飲み比べしているようです。

そうした中、私の故郷・秋田県にある「クラフトサケ」を造る醸造会社が全国にある同業社に呼びかけて、「クラフトサケブリュワリー協会」を立ち上げたニュースが飛び込んできたので、帰省のついでに寄ってみました。

場所は、秋田市街からクルマで40分くらいの男鹿市内。日本海に面した男鹿半島にあり、寒風山回観展望台、男鹿水族館 GAO(ガオ)などの観光施設が人気。「鳴ぐコはいねが～」で有名な「ナマハゲの里」としても知られています。その会社は『稲とアガベ醸造所』。JR 男鹿駅にすぐ隣りにあり、2021年秋に開業しています。この耳慣れない「アガベ」とは、メキシコの蒸留酒・テキーラの原料となる植物のことで、このシロップを酒造りの原料に加えて「クラフトサケ」を造っています。



男鹿市にある『稲とアガベ醸造所』と隣接する「土と風」

さて、現在の日本では、清酒製造免許がないと日本酒が造れません。しかも、その免許の新規発行が、日本酒の需給バランスを考慮されているため認められていないのが現状であり、新規参入はまず難しいとされています。そこで、2020年に酒税法が改正された際、日本酒の輸出拡大を目的とした制度「輸出用清酒製造免許」を取得し、海外向けの日本酒造りをスタート。同時に国内向けでは、「その他の醸造酒免許」を取得。日本酒同様に米と米麴を用いて仕込みますが、副原料を加えることで日本酒に近いサケ、いわゆる「クラフトサケ」の酒造りを始めました。



- 左から
- ・クラフトサケ「稲とホップ」
 - ・DOBUROKU「生酛」 秋田県産無肥料 無農薬米 亀の尾使用・生酛造り
 - ・クラフトサケ「ササニシキとホップ」
- 各1本 720ml 3,300円(税込)

醸造所に隣接しているショップ&レストラン「土と風」では、クラフトサケ「稲とアガベ」「稲とホップ」も販売。お土産に、「DOBUROKUseries どぶろく」(3,000円)を購入しました。濃厚ですが、サラリとして飲みやすいお酒でした。「クラフトサケブリュワリー協会」には全国6醸造所が参加。より豊かな酒の文化を築くことを目指し、また自由で個性的なサケ造りを通して、クラフトサケの知名度度を上げ、作り手を増やしていきたいとの目的を掲げています。

この同業社組合に参加している一つが福島県南相馬市小高区にもあります。「haccoba(ハッコウバ)」という醸造所です。こちらは2021年2月にオープン。震災と原発事故の避難指示解除後もなかなか元には戻らないこの地で、本来、日本酒とその酒蔵が持っているような、地域の人々との関わり方の深さと広がりを活かして、新しい地域の文化を再構築していこうとの思いがあるそうです。

メインのクラフトサケは、日本酒の発酵過程でビールの原料ホップを加えた「はなうたホップス」。昨年冬に仕込んだ分は完売となっていました。この5月には、アジカン後藤正文 Gotch さんたち5名のアーティスト制作の「微生物に聴いてもらう音楽」を発酵過程で麹菌に聞かせ、「全麴」という製法で造った商品「土-D-」を発売中です。



『haccoba』と「土-D-」(オリジナル楽曲アルバム付 8,800円 税込)

秋田県も福島県も古くから日本酒の醸造文化が土地に根付いている地域。祝いの席にも哀しみの席にも必ず飲まれてきました。酒造りは地元の皆さんから愛される旨さがあつたからこそ、このように永く受け継がれているのだと思います。「クラフトサケ」にも同じことが言えます。新しい味わいのお酒が地域に支持され、そして一過性の盛り上がりで終わらず、永く受け継がれていくように、もちろん、福島県の日本酒も含めて、多様化していくお酒全般を応援していきたいと思います。

佐藤 元(会員) 秋田県出身

- 稲とアガベ醸造所
(秋田県男鹿市船川港船川新浜町1-21)
- haccoba -Craft Sake Brewery-
(福島県南相馬市小高区田町2丁目50-6)